

令和4年度中学校武道授業（柔道）指導法研究事業



両足を抱えて転がる受け身の指導

令和4年度中学校武道授業(柔道)指導法研究事業
〔主催＝日本武道館・全日本柔道連盟・日本武道協議会、後援＝スポーツ庁、協力＝練馬区立貫井中学校〕
が、6月17日から19日までの3日間、講道館(東京都文京区)において、研究者10名、連盟事務局3名が出席して実施された。

10月の第13回全国中学校(教科)柔道指導者研修会に向けて、安全かつ効果的な指導内容、留意事項などを明確にすることを目的に指導法発表、研究協議が行われた。

■1日目(6月17日)

開講式では、はじめに中里壮也^{なかざとそうや}全日本柔道連盟専務理事、吉川英夫^{よしかわひでお}日本武道館理事・事務局長が、それぞれ主催者挨拶を述べた。

開講式終了後、高橋健司^{たかはしけんじ}研究者が、本事業は授業の工夫を研究することではなく、スキル向上のためにどのように伝授、伝達するのかを研究することが一番の目的であると確認があった。

その後、課題の整理や指導計画の検討が行われ、木村昌彦^{きむらまさひこ}研究者から、生徒に興味や関心を持たせるためには、「理合」を意識したカリキュラム作りを心掛けるべきであるとの意見が出された。また、田中裕之^{たなかひろゆき}研究者からは、専門的になりすぎず、柔道を知らない人でもできるような工夫が必要ではないか。高橋進^{たかはしすすむ}研究者からは、技の名称等の漢字表記や送り仮名を統一すべきではないかといった提案があった。

これらを踏まえ、2日目に実践研究を行う研究者は、担当する課題別指導内容案に基づき、指導のねらいや評価の観点などの検討を重ねた。

■2日目(6月18日)

練馬区立貫井中学校の協力のもと、はじめに向井幹博^{むかいみきひろ}研究者が礼法の実践を行った。礼には、敬意の気持

を伝えるために、相手に合わせる必要があることや、物や施設に対しても礼の気持ちを忘れてはいけないことを説き、手や足の運びの所作を一つ一つ指導した。

続いて、前瀧大吾^{まえたきだいご}研究者が受け身の指導を行い、手をついたときに痛がる初心者が見受けられるが、手から肘にかけてつくようにすると良いとアドバイスがあった。

山根友樹^{やまねともき}研究者による膝車の指導法では、取り・受け・観察・安全管理の4人1組となり、「前に出てくる足を止めると投げられる」をキーワードに順を追って指導した。

濱岡睦月^{はまおかむつき}研究者による体落としの指導法では、投げる際の取りの腕の使い方について、右手は招き猫のポーズで親指はこめかみの位置、左手は腕時計を見る位置といった表現を用いて分かりやすく指導した。

高品亮輔^{たかしなりあすけ}研究者による固め技の基本と応用の指導法では、袈裟固めから逃れるために生徒に実際に声に出させて指導したり、横四方固めでは、抑える者の体が丸くなってはいけないなどのポイントが示された。

実践研究終了後、評価の観点を中心に指導の振り返りが行われた。高橋進研究者からは、教え方は多岐にわたっても良いがシンプルであることが肝要である。線と広がりが必要になるだろうと発言があった。また、向井研究者からは、生徒たちが大外刈りについて知りがっていたので、どのようにしたら危険で、どのようにしたら安全に対処できるのか検討しておく必要があるのではないかと提案があった。

■3日目(6月19日)

10月の全国研修会に向けて、2日目までの振り返りと検討が行われた。研修会では受講生向けにもう少し体を動かす時間があっても良いのではないかといい意見や、技能の評価があって思考力や判断力につながるため、技能ルーブリックを作成してはどうかとの意見が出された。奥儀幸朝^{おくぎゆきとも}研究者からは、評価や単元計画、指導案の基本的な考え方を示す上でも、技能ルーブリックの作成が必要になるだろうとの発言があり、叩き台を作成し、研修会前に全研究者で打合せを行うことを確認した。

閉講式では木村研究者が講評を行い、全日程を終了した。